



ICOMOS Japan

c/o Japan Cultural Heritage Consultancy
2-5-5-13F Hitotsubashi, Chiyoda-ku, Tokyo, 101-0003, Japan.
Tel&Fax: +81-3-3261-5303
E-mail: jpicomos@japan-icomos.org

プレスリリース

解禁日時：2021年2月10日 正午

日本イコモス賞・日本イコモス奨励賞 2020

日本イコモス賞・日本イコモス奨励賞 選考委員会

日本イコモス賞

榎文彦氏（榎総合計画事務所）・朝倉健吾氏（朝倉不動産株式会社）

「リビング・ヘリテージとしてのヒルサイドテラス 1969-2019」

日本イコモス賞

富岡市「旧富岡製糸場 国宝「西置繭所」－近代産業遺産の先駆的保存活用プロジェクト」

日本イコモス奨励賞

栗野隆氏「日本の近代庭園の価値の立証と保存に関する調査・研究」

選考理由及び主たる業績

日本イコモス賞

榎文彦氏（榎総合計画事務所）・朝倉健吾氏（朝倉不動産株式会社）

【略歴】

榎文彦氏：1929年東京都生まれ。榎総合計画事務所代表。

東京大学工学部建築学科卒業後、渡米。クランブルック美術学院およびハーバード大学大学院修了。1965年帰国後、榎総合計画事務所設立。日本建築学会賞、プリツカー賞、UIA ゴールドメダル、村野藤吾賞、AIA ゴールドメダル等、受賞多数。著作として「見えがくれする都市」等。日本を代表する建築家として国内外に数多くの建築を設計。

朝倉健吾氏：1941年東京都代官山生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。朝倉不動産株式会社代表取締役。ヒルサイドテラス・オーナー。

曾祖父の代から続く朝倉家の一員として、長年代官山の街づくりに貢献。渋谷区文化芸術振興推進協議会委員。代官山ステキなまちづくり協議会副代表。一般財団法人渋谷区観光協会評議員。

【授賞業績】

「リビング・ヘリテージとしてのヒルサイドテラス 1969-2019」



ICOMOS Japan

c/o Japan Cultural Heritage Consultancy
2-5-5-13F Hitotsubashi, Chiyoda-ku, Tokyo, 101-0003, Japan.
Tel&Fax: +81-3-3261-5303
E-mail: jpicomos@japan-icomos.org

プレスリリース

解禁日時：2021年2月10日 正午

【授賞理由】

「ヒルサイドテラス」は、渋谷区の旧山手通り西側の朝倉家旧邸宅（重要文化財）を核に、長年にわたり継続されてきた朝倉家と建築家・榎文彦氏によるまちづくり事業であり、現代の日本の都市における民間地区開発の稀に見る成功例である。そして昨年、朝倉家旧邸宅は建設から100年が経ち、またヒルサイドテラスは第一期の竣工から50周年を迎えた。この土地における朝倉家の歴史は、明治初年の朝倉米店まで遡るが、昭和初期には近隣に建設された同潤会代官山アパートに触発され、民間におけるモダンな集合住宅の開発に取り組むことになる。第二次世界大戦における日本の敗戦は、朝倉家に大きな痛手を与えたが、父祖伝来の土地における良好な都市開発への強い思いが、その後、建築家・榎文彦との幸福な出会いを生み、ヒルサイドテラスの実現へと繋がるのである。

1969年竣工の第1期（A・B棟）から1998年竣工の第6期（ヒルサイドウェスト）まで、30年という長い年月をかけたヒルサイドテラスの建設計画は、最先端で豊かな都市環境づくりを目指して、朝倉家と建築家、および多数の関係者が一体となって進められたものであった。集合住宅・店舗・オフィスからなる複合施設としての建築群には、長い時間的経過によって適度な多様性が見られる。高さ10mの法規制のもとにスタートした事業は、その後の規制緩和の中でも低層スカイラインの原則は守りつつ、外装の仕上げや空間構成は時代によって様々に変化し、ヒューマンスケールの心地よい都市環境が創出されている。こうした歴史の中で醸成されたヒルサイドテラスの建築群は、20世紀前期に繰り広げられたCIAM（近代建築国際会議）などのモダニズム都市建築理論に対する批判的視点も兼ね備え、都市における現代建築の在り方についても改めて考えさせる存在となっている。

さらに朝倉家と建築家も積極的に参画している「代官山ステキなまちづくり協議会」、「代官山ステキ総合研究所」などのヒルサイドテラス周囲の地域コミュニティによる、まちづくり活動と様々な文化イベントは、現代の日本の都市において特筆すべき成果を残してきている。これらの活動に参加された個人・団体の数多くの業績については、ヒルサイドテラス50周年にあたり発刊された『HILLSADE TERRACE 1969-2019』（ヒルサイドテラス50周年実行委員会編）を是非ご覧いただきたい。

かつては人々の生活している伝統的集落などが“リビング・ヘリテージ”と呼ばれた。しかし現在では、20世紀の建築も含む、使われ続けている文化遺産が“リビング・ヘリテージ”と呼ばれるようになった。単なるモニュメントとしての建築に留まることなく、街や人々と共にあるヒルサイドテラスの建築群は、環境と文化を形成し受け継いでいく“リビング・ヘリテージ＝生きた文化遺産”のモデルであり、日本における都市環境づくりのお手本として、これからも長く生き続けてゆくに違いない。

第一期完成直後に榎文彦氏によってヒルサイドテラスと名付けられた現代のまちなみは、既に文化遺産の仲間入りを果たしている。2003年にはDOCOMOMO Japanの近代建築100選、2017年には日本における20世紀遺産の一つに選定され、さらに2018年には、第一期のA・B棟が東京都選定歴史的建造物となった。日本イコモス国内委員会は、ヒルサイドテラス事業におけるすべての人々の努力を讃えるとともに、常にその中心となってプロジェクトを推進してきた榎文彦氏（榎計画総合事務所）と朝倉健吾氏（朝倉不動産株式会社）に「日本イコモス賞2020」を授与するものである。

【プロジェクト概要】

1969年 第1期（A・B棟） / 1973年 第2期（C棟） / 1977年 第3期（D・E棟） /
1979年 デンマーク大使館（隣接敷地） /
1985年 第4期（ヒルサイドアネックスA・B棟 設計：元倉眞琴） /
1987年 第5期（ヒルサイドプラザ） /
1992年 第6期（F・G・H棟） / 1998年 ヒルサイドウェスト



日本イコモス賞

富岡市

【プロジェクトの経緯】

明治5年(1872)	西置繭所竣工、富岡製糸場操業開始
明治26年(1893)	富岡製糸場民営化
昭和62年(1987)	富岡製糸場操業停止、片倉工業による維持管理
平成17年(2005)	富岡市への譲渡、「旧富岡製糸場」として史跡指定
平成18年(2006)	西置繭所を含む7棟等が重要文化財指定
平成26年(2014)	「富岡製糸場と絹産業遺産群」として世界遺産一覧表に記載、西置繭所を含む3棟が 国宝指定
平成27年(2015)	国宝西置繭所保存整備工事着工
令和2年(2020)	国宝西置繭所保存整備工事竣工

【授賞業績】

「旧富岡製糸場 国宝「西置繭所」－近代産業遺産の先駆的保存活用プロジェクト」

【授賞理由】

世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」の主たる構成資産である旧富岡製糸場の建築群における3棟の国宝建造物のうちの1棟である「西置繭所」について、これまでにない理念と方法によって先駆的な保存活用を実現したプロジェクトである。保存修理委員会、遺構調査検討部会、整備活用計画実行委員会での議論をもとに、富岡市を事業主体に、文化財建造物保存技術協会の設計監理の下、構造、設備、照明設計に各設計事務所が協力する体制で推進された。

2015年1月に着工し、2020年5月に竣工したこのプロジェクトの特徴は、桁行104mに及ぶ長大な2階建ての明治初期木骨煉瓦造建築が長きにわたり使われ続けてきた過程を尊重する姿勢から、115年間の操業の痕跡と労働の記憶を維持継承するという考え方の下に、保存修理・構造補強・活用を一体として捉え、一貫した理念により実施した点にある。本事業を象徴するものが、1階の広範囲に挿入されたハウス・イン・ハウスのガラスボックスである。構造補強のためのものでありながら、鉄骨フレームと強化合わせガラスを一体として用いることで透明性を確保し、展示室やホール等としての活用に繋げている。補強材は可逆性に最大限に配慮して取り付けられ、かつ材寸も押さえて建造物の木部から容易に区別できるよう配慮される。照明もこの補強材を利用しつつ、建造物自体と展示・活用のための照明が控えめに配される。国際的な文化財修復理念に適う一貫性のある修理方針が取られ、新規挿入部分も優れたデザインでまとめられている。

構造補強と活用を一体化した合理的な解決として高く評価できる一方で、ガラスボックスが1階のほぼ全てを覆っており、適用範囲がやや広く見えるが、これは保存修理の方針の結果でもある。この事業では綺麗に整えるという日本の建造物修理に無意識に取られがちな態度が徹底して排除され、この建造物の最大の価値である明治以来115年間操業が続けられてきた産業遺産としての歴史の保存継承に意識が向けられている。今回の修理では全解体の手法を取らず、部分修理に止めつつ構造補強を行うことで、現状を保存し、この建造物が経てきた時間経過を尊重している。台車の壁への擦り跡、落書きや書き込みが丁寧に保存され、さらには剥がれかけた天井の漆喰もオリジナルの下地が見える状態で塗り直さずに保たれる。ガラスボックスはこうした修理方針を担保するもの、すなわち壊れやすい細部を維持しながら公開していくという目的でも機能しており、それ



ICOMOS Japan

c/o Japan Cultural Heritage Consultancy
2-5-5-13F Hitotsubashi, Chiyoda-ku, Tokyo, 101-0003, Japan.
Tel&Fax: +81-3-3261-5303
E-mail: jpicomos@japan-icomos.org

プレスリリース

解禁日時：2021年2月10日 正午

ゆえに適用範囲が広がったものと解される。また、2階は対照的に構造補強材が最小限に抑えられ、建造物そのものを味わう空間とされている。ここにはこの施設群が操業停止後も旧所有者の片倉工業によって維持されてきたことへの敬意もうかがえよう。

以上のように、本プロジェクトは、使い続けられてきた産業遺産としての価値に正面から向き合い、その保存修理、構造補強、活用を一貫した理念と方針により実現したもので、日本における文化遺産の保存活用のあり方を根本から問い直す新たな提案を高い完成度で示している。旧富岡製糸場には大量の建造物群が保存整備と活用を待っているが、このプロジェクトがこれらの保存活用の強力な推進力ともなることであろう。日本イコモス国内委員会は、本プロジェクトに関わるすべての人々の努力を讃えるとともに、その推進主体である富岡市に「日本イコモス賞 2020」を授与するものである。

【関連業績】

富岡史編纂委員会『富岡史』富岡市、1955

富岡製糸場誌編纂委員会『富岡製糸場誌』富岡市、1977

文化財建造物保存技術協会『旧富岡製糸場建造物群調査報告書』富岡市、2006

富岡製糸場総合研究センター『富岡製糸場総合研究センター報告書』（2010年より毎年刊行）富岡市、2010-

富岡市編著『富岡製糸場 継承される革新の歴史』Echelle-1、2020

文化財建造物保存技術協会編集『国宝旧富岡製糸場西置繭所保存修理工事報告書』発掘調査編、建造物編、建造物図面編、富岡市・富岡市教育委員会、2020

日本イコモス奨励賞

栗野隆氏

【略歴】

1976年生まれ 東京農業大学 地域環境科学部造園科学科 准教授・博士（造園学）

2004年3月 東京農業大学大学院農学研究科農学専攻博士後期課程修了

2004年04月－2010年03月 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 研究員

2010年04月－2015年03月 東京農業大学 地域環境科学部造園科学科 助教

2015年04月－現在 東京農業大学 地域環境科学部造園科学科 准教授

【授賞業績】

「日本の近代庭園の価値の立証と保存に関する調査・研究」

【授賞理由】

文化財庭園の保存活用に当たっての特殊性は、その庭園の芸術・観賞価値を明確にする必要があることだが、江戸から明治への一大変革期に生まれた近代庭園群は、首都圏における関東大震災さらには全国での戦災被害の結果、所有者も交代する中で史資料とともに失われあるいは変更が加えられたものが多く、実態と変遷に関する調査・研究や文化財としての評価も十分にはなされてこなかった。文化財庭園のもう一つの特殊性は、植物という構成要素を含むため常に変化していることで、その景観構造は現状の評価だけでは解明できない。庭園の芸術・観賞価値は、現状の評価に加え作庭時・変更時の時代背景・人・技術・素材により作られるため、それらの丹念な研究の積み重ねによって可能となる。



ICOMOS Japan

c/o Japan Cultural Heritage Consultancy
2-5-5-13F Hitotsubashi, Chiyoda-ku, Tokyo, 101-0003, Japan.
Tel&Fax: +81-3-3261-5303
E-mail: jpicomos@japan-icomos.org

プレスリリース

解禁日時：2021年2月10日 正午

現在、国の名勝・史跡となっている庭園はおよそ 250 件在る。2000 年度からの指定数が多く約 3 割を数えるが、そのうち 4～5 割が明治時代以降に作られた近代庭園である。それらの保存活用に際して、日本の近代庭園を通覧する研究が期待されている。

栗野隆氏は、博士論文『旧岩崎邸庭園の復原計画設計のための基礎的研究』（2004 年東京農業大学提出）以降、国立文化財機構奈良文化財研究所（2004-2010）、東京農業大学（2010-現在）において、日本の近代庭園を軸とした調査・研究を継続している。具体的には、近代庭園に特有の意匠的側面や、時代に即した材料の具体的な使い方などの観点から調査分析をおこない、日本の近代庭園の空間的特徴を明らかにしてきた。「擬木擬石」とその技術者についての研究においては近代庭園の評価を拡大し、新素材であったセメント工作物の保存整備技術についての知見を提供している。

さらに、上記の調査研究で得られた知見を糧に、琴ノ浦温山荘庭園（和歌山県海南市）、旧齋藤氏別邸庭園（新潟県新潟市）、清閑亭庭園（神奈川県小田原市）等の近代庭園の保存に資する調査や計画実務を継続し、近代の庭園作品群の社会・文化的な文脈の中での価値を立証する学術的活動を展開してきた。近年では、その一連の活動を『近代造園史』（2018）の著作に結実させた。

この本では明治時代に日本が取り組んだ西歐的近代化のなかで生まれた「純洋風庭園」、和風と洋風を調和させる様式としての「芝庭」、人々の生活を反映した「実用主義の庭」、新しい自然観を持つ近代数寄者などの施主と作庭者によって造られた「自然主義庭園」、昭和時代になって自然主義庭園が様式化した「雑木の庭」などについて通覧し、これら近代庭園の時代性と作者の評価を検証している。

大学における講義資料を基にしているこの著作では、前近代の江戸期「遊園」、明治期に発祥した「公園」、欧米における近代造園についても評価・検証し、近代ランドスケープ遺産保全の現在についても紹介している。これらの内容は、これからの文化財庭園の調査・研究・実務を担う人材育成においても有意義なものと高く評価される。

文化遺産としての近代庭園が重要性を増す中で、日本イコモス国内委員会はそれらの保存・活用において栗野隆氏の諸活動が多大な貢献をしていることを認め、「日本イコモス奨励賞 2020」を授与する。

【主要業績】

- ・著書 『近代造園史』2018 建築資料研究社
- ・学術論文 「擬石・擬木の造園的利用の系譜からみた琴之浦温山荘園の造園史的位置づけについて」『ランドスケープ研究』（日本造園学会誌）72（5）・2009
「近代の大阪および阪神間を中心とした擬木・擬石・擬岩の導入と展開」『ランドスケープ研究』74（5）・2011
「日本近現代の歴史的庭園の調査・保存・修理を巡る状況からみた森蘊の評価」（共著）『日本庭園学会誌』No. 33 号 2020
- ・保存整備計画 旧齋藤氏別邸庭園保存管理・整備基本計画 2013/03
- ・論説 「日本近現代の住まいの庭の系譜」『和 MODERN』新建新聞社 2018/12

他、報告書、学会発表など多数

《本件に関するお問合せ先》

日本イコモス国内委員会事務局 担当：矢野/田原

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 岩波書店一ツ橋ビル 13F 文化財保存計画協会気付

E-mail:jpicomos@japan-icomos.org